

地域に開かれた文化創造拠点としての 大学ミュージアム構想に関する研究 —現代アート展「船／橋 わたす」の企画・実施を通して—

奈良県立大学 地域創造学部
専任講師 西尾美也

1. 研究の背景と目的

近年のミュージアムをめぐる議論のひとつに、植民地時代に形成された権力装置としてのミュージアムのあり方を見直し、地域社会におけるミュージアムの可能性に注目する視点がある。収蔵・展示資料に関する住民自決や現地保存、参加型の調査など、地域コミュニティに根ざした活動を展開することで、ミュージアムがその地域の人びとの誇りやアイデンティティの核となり、地域の活力の源泉になっていくことが期待されているのだ。また、大学の地域社会への貢献が期待される時代においては、学術標本の収集、保存、活用を充実させ、諸情報を発信、受信する基地として「大学ミュージアム」が位置付けられ、生涯学習機関として一般市民にも使用されることが、1996 年の学術審議会による報告¹で提言された。

本研究では、「ミュージアム」と「大学」「地域」を掛け合わせるこうした可能性に着目し、奈良県立大学を「地域に開かれたミュージアム」として構想する。本学に施設としてのミュージアムは存在しないが、状況を変換するアートの技法²を用いることで、ミュージアムではない場所をミュージアムにすることが可能になる。そのようにして実際にミュージアムとして大学を開くことで、市民との直接的な交流を可能にし、本学の新たなイメージを打ち出すことを目的にしている。具体的には、①大学内の各所を展覧会場にして、②学生の研究成果を市民に公開すること、および③招聘アーティストの展覧会を開催することを通して、④今後に向けた本学ならではの大学ミュージアムのあり方について提言を行う。

また本研究は、これらの実践を教育プログラムとしても位置付けている。本学には作品制作における技術的な演習の授業は設けられていないが、学生は、本研究を通して、自らの研究成果を形式にとらわれない自由な発想や方法で表現することを、また、招聘アーティストの展示企画をプランニングし、運営することで、展覧会作りに必要な具体的なノウハウを学ぶ。

2. 具体的な取り組み内容

本研究に参加した学生は、都市文化コモンズの西尾ゼミに所属する 3 年生 5 名および 4 年生 3 名に、有志メンバーとして名桜大学からの交換留学生 1 名を加えた計 9 名で構成されている。まず、展覧会作りに関する基礎知識の習得を目的に、難波祐子著『現代美術キュレーター・ハンドブック』を輪読し、展覧会作りの流れや展示計画、会期中の管理など

について学習した。

次に、国立国際美術館で開催されたライアン・ガンダーの個展「この翼は飛ぶためのものではない」と、二条城で開催された「東アジア文化都市 2017 京都『アジア回廊 現代美術展』」を鑑賞した。前者は著名なコンセプチュアル・アーティストの展覧会であり、技芸に頼る表現ではなく思考をいかに形にするかという点で、芸術を専攻しない本学の学生にとって参考になると考えた。また、後者は通常は展覧会の会場ではない場所で展示を行う点で本学での展覧会と共通しており、展示技法や誘導看板などの会場計画が参考になると考えた。

こうした展覧会作りに必要な企画者としての観点に加えて、参加学生は、各自の関心に基づいてテーマを設定した上で、関連する先行研究のリサーチ結果と自身の作品の構想を発表し、筆者からのコメントを得てアイデアをブラッシュアップさせていく作業を前学期中に何度か行った。展覧会の開催を 2017 年 10 月と定めて、夏季休暇中を実際の調査、制作期間とした。

指導の際には、各自の問題意識が明確でユニークかどうかという点を重視した。このプロセスは必然的に各自のアイデンティティや置かれた立場について掘り下げる作業になった。具体的な作品については各学生が執筆した卒業論文および作品解説文に詳しいが、たとえば、これまで当たり前に過ごしてきた家族という関係性についてスナップ写真の手法を通して再考した学生（図 1）や、芸術を専攻しないという立場と自身の入院経験から「身近なホスピタルアート」のあり方を探求した学生、植物と人間についての考察から、草木染めの衣服で「分配された人格」を表現した学生（図 2）、自分の感覚や言葉が相手に伝わらないもどかしさから、「差異」を表現に変えるワークショップを企画した学生など、テーマや表現方法はきわめて多岐に渡った。他にも、普段から役者として演劇を実践している学生は、その経験から台本が同じでも役者によって表現が異なる面白さに着目しており、ある意味で表現されたものの裏側に焦点をあてる演劇ワークショップを企画したり（図 3）、視覚障害者と楽しむ美術鑑賞法の存在を知って純粋に驚いた学生は、美術を観る多様な方法について検討し、オリジナルの鑑賞法を提案したりするなど、芸術を専攻しない立場として、自らが作り手と受け手の立場を行ったり来たりしながら、その関係自体を対象化する研究・表現を実現している。

詳細は次節で述べるが、展覧会を広く一般に開かれたものにすべく、参加学生は、各自の表現物の制作、展示だけでなく、招聘アーティストによる展示の企画・運営にも携わった。同時代のアーティストについて調査し、奈良県立大学で制作あるいは展示をしてもらいたいと思うアーティストについて提案する機会を設けて議論を重ね、最終的に伊東宣明、阿児つばさ、チェ・ジョンファの 3 名を招聘アーティストとして本学に迎えることができた。

展覧会は、2017 年 10 月 23 日から 29 日にかけて本学にて開催した。招聘アーティストの阿児とチェが本学に視察に訪れた際に、二人とも古びた 4 号館をいたく気に入っていた。展示する場所が見え方に大きく影響を及ぼすような作品を作っていた参加学生も、4 号館の廊下や教室、裏庭、部室部屋などを積極的に希望した（図 4）。そこで、展覧会のメイン会場を 4 号館に設定した。今後、本学ではキャンパス整備が予定されており、4 号館は数年後に解体されることが決まっている。本研究を通して自分たちの「場所」について考え

ることは、それ自体が今にしかできないユニークな実践研究と言えるだろう。

展覧会名は、参加学生との議論の末、「奈良県立大学 現代アート展『船／橋 わたす』」とした。「船／橋 わたす」は、本学が位置する船橋町の名にちなんで、さまざまな価値観をのせた作品という「船」を渡し、異質なものの同士をつなぐための「橋」を渡すというイメージで名付けられた。現代アートを通じて、船橋町という「港」に人々が集まり、そして渡っていくように、本展が当エリアの新しいプラットフォームになることを目指して、後輩学生が、今後、毎年開催していくことも視野に入れられている。



図1 部室を使った写真展（学生作品）



図2 屋外でのインスタレーション（学生作品）



図3 教室を使った演劇ワークショップ（学生作品）



図4 暗い廊下にただよう立体造形（学生作品）

参加学生は、告知チラシの原稿準備から、配架計画、関係各所への郵送、SNSでの周知、周辺店舗への挨拶まわりまで、一連の展覧会広報についても学んだ。また、ワークショップやトークイベントなどの関連イベントを企画・実施するとともに、会期中の受付業務も分担して行った。

また、展覧会で発表した作品については、その後、4年生は卒業論文として、3年生は作品解説文としてまとめる作業を行った。一般的な論文と同じように、問題意識や研究手法、先行研究、実践と分析などの項目に分けて、自身の作品制作の経験を言語化することで、自らの考えを改めて整理し、第三者に伝えることを目的にした。

また、展覧会終了後には、カタログとしてこれら卒業論文および作品解説文の掲載に加え、次に紹介する招聘アーティストによる展示をまとめた『奈良県立大学 現代アート展 2017 「船／橋 わたす」ドキュメント・ブック』を発行した。

3. 招聘アーティストの選定プロセス

参加学生は本学での展覧会作りという課題を前にして、「アートとはいったい何だろうか」と問い続けており、その点で、伊東宣明の映像作品を提案する学生がいたのは必然的だったと言える。伊東は、前学期に筆者が担当する現代アート論のゲストとしてレクチャーをしており、その名も《アート》という自身の映像作品を学生たちに紹介していたからだ。その映像は、作者本人の背景に多くの名画や制作の現場、アート鑑賞や観光をする人びとを映しながら、「アートの本質」について自画撮りで語るものである。自画撮りという手法やミュージックビデオ風の映像が学生にとって親しみやすかつただけでなく、さまざまなアートに関する言説をカットアップしてまとめられた「アートの本質」についての語りが、学生たちにとっては単純にわかりやすいアートの解説として響いたのだろう。また、展覧会の会場ではない場所で展示を行うにあたって、プロジェクターのある教室という空間は比較的容易に映像作品のための上映空間に変換できると考えられた（図5）。伊東は鑑賞者の体験として、《アート》の最後のシーンを上映場所で撮影することにこだわりを持っており、一部の学生はアーティストの制作現場を実際に見学する貴重な機会を得ることができた。

阿児つばさを招聘アーティストとして提案した学生は、奈良県立大学を「突っ込みどころが満載」として、そうした状況に外部のアーティストが介入することで起こる化学反応を、次のように期待している。「阿児つばさは『わからない』と感じたことや興味を持ったことについて調査したり、自分のなかで考える過程でそこに隠された情報、物語の本質をインスタレーションや作品に落とし込みます。（中略）いままで当たり前すぎて知らなかった、見落としてきた『奈良県立大学』の魅力や、新たな面の発見につながればいいなと考えています」。

また、阿児を提案した学生は、夏季休暇中に「京都:Re-Search 2017 in 京田辺」という公募企画に自らアーティストとして参加し、そこで同じアーティストとして参加していた阿児と知り合うことになった。こうした偶然にも助けられ、阿児は本学での展覧会参加を快く引き受けてくれた。

阿児は、予算規模やスケジュールを考慮し、一からリサーチをして発案した新作ではなく、以前よりあたためていたアイデア《鳥が入りますので 窓を開けないでください。》を本展で発表することを提案してくれた。実際、この作品は本学校舎の窓を、また想像上の鳥を鑑賞者に意識させることになり、実際に窓を開くように、本学を外部へと開いていくような作品となった。また、4号館の使われなくなった受付を、阿児作品の受付・案内場所にしたり（図6）、阿児が用意した原稿を学生が構内放送を用いて朗読するといった要素もまた、本学の「隠れた情報や物語」をすくいあげるようであった。

もう一人の招聘アーティストであるチェ・ジョンファについては筆者が提案した。チェは韓国を代表する現代アーティストの一人で、参加者とのワークショップを通して作る日用品を使ったカラフルな作風で知られている。「生活こそがアートであり、誰もがアーティストである」と一貫して主張している点でも、芸術を専攻しない本学の学生と相性が良いと感じていた。しかし、実績ある国際的なアーティストであるため、通常であれば今回の予算規模では到底参加の要請はできない。ところが、チェは上述の「アジア回廊 現代美術展」に出品しており、その関係者から展覧会終了後の作品素材の行方について検討してい

ることを筆者は聞かされていた。具体的には、韓国でキムチを作る時にどの家庭でも使われているという赤と緑のザルを使った作品で、会期終了後には、そのザル約一万個を廃棄するかもしれないとのことだった。

そこで、筆者はその関係者を通じて、本学での教育のためにもザルの一部を提供してほしいと展覧会の運営委員会とチェに相談を持ちかけた。チェと筆者は、「さいたまトリエンナーレ 2016」という芸術祭で同じ出品アーティストの立場で間接的に関わりがあり、同じ「生活」をテーマにした作家として共感してくれていたことで交渉はスムーズに進んだ。

参加学生のうちの一人が、空間のイメージを大きく変えるインスタレーションの手法が、本学で展覧会を行う際に多くの人の目を引く仕掛けとして効果的なことに興味を示しており、具体的な素材や手法について検討しているところだった。大掛かりなインスタレーションには材料費もかさむために、筆者がこの学生にチェの作品の制作リーダーになることを勧めた。



図5 教室を利用した伊東宣明による映像作品の上映



図6 阿児つばさ作品の受付・案内をする学生



図7 4号館裏のスロープをまるで異世界へと通じる道のように変換したチェ・ジョンファ作品

このようにして、3名の招聘アーティストが決定した。伊東には本学学生や鑑賞者が「アート」を理解するための道しるべとしての役割を、阿児にはよそ者として本学を作品によって照らし出すことを、チェには地域と本学をつなぐ空間演出と参加型の制作スタイルをそれぞれ求めたと言える（図7）。

なお、招聘アーティストの作品内容については、上述のドキュメント・ブックに詳しい。伊東と阿児の作品についてはそれぞれ作家に対するインタビュー記事を、チェの制作プロセスや作品内容については、制作リーダーを務めた学生の作品解説文および本学で開催された国際セミナーにおけるチェの講演会レポートを参照されたい。

4.4 号館を生活のミュージアムに

チェ・ジョンファの作品制作においては、「アート作品の制作ボランティア募集」として呼びかけ、会期前の約2週間にわたって制作ワークショップを開催した。本学学生や近隣住民、美術部に所属する高校生、アート愛好家など、学内外から集った40名以上のボランティアが、約2500個のザルを結束バンドでつなぎ合わせ、学内をザルのインスタレーションで彩る作業に参加した。学外のボランティアからは、「チェさんの作品でありながら、若い学生や私たちに作品形態や展示を任せる発想に驚くとともに、そうして作品がどんどん意味を持っていくのだろうな」と感想が寄せられた。

展覧会には、本学学生だけでなく、地域住民やアート関係者など、期間中に約400名が足を運んでくれた。学生にとっては、「大学にこんな場所があったとは知らなかった」「作品の制作に参加できてアートの見方が変わった」など、自分たちの場所を再発見したり、アートの可能性を知る機会になったことがわかった。外部からは、「県立大に訪れるきっかけになってよかった」「学生さんの解説付きで鑑賞することも含めて現代アートの新しい体験になった」「学生作品のクオリティが予想以上に高く、自分の制作のヒントになった」などの感想が寄せられた。

本稿では触れなかったが、チェの作品は近鉄奈良駅前行基広場でも展開した。その際に奈良市文化振興課に協力を得たことをきっかけに、その後、奈良市が企画する奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2017-2018」に筆者がディレクターとして、チェが招聘アーティストとして関わることになった。このアートプロジェクトは、2018年3月に開催され、奈良市役所やならまちセンターをはじめ市内各所を展示会場としてチェの作品が展開された。本学4号館裏のスロープに展示した作品は、もともと利用者のないスロープであったことと、ザルという素材が雨風の影響を受けにくいことから、会期後も常設展示していたために、当アートプロジェクトの会場のひとつとして再び市民に公開される機会を得た。まさに本研究の成果を外部に公表する機会として、「本学ならではの大学ミュージアム」が機能したと言えるのではないだろうか。

チェの「生活こそがアートである」という主張は、「生活は、普通はアートとは考えられていない」という共通認識があってこそ成立するコンセプトである。その意味で、やはり彼の視点は「状況を変換する」という手法や、「ミュージアムではない場所をミュージアムにする」という本研究の目的と符合していたと考えることができる。また、芸術を専攻しない立場から何かを表現しようとした学生たちの作品制作には、各自の生活における問題関心が強く反映されていた。本学が掲げる「地域創造」にアートが果たす役割があるとす

れば、それは個人個人の生活に深く向き合い、日常をクリエイティブでより豊かなものにすることで、それが翻って社会へと還元されてゆくということではないだろうか。

チェや阿児が新しく完成したばかりの地域交流棟ではなく、古びた4号館に強い興味を示したことも示唆的である。50年や100年という一人の人間が生きる程度の歴史を持った建造物を、チェは「未来の遺産」と呼び、ワークショップを通じて人びとが集う場に変換し、そこに異質な現代アートを展示することで、参加者や鑑賞者にその場所固有の歴史に改めて意識を向けさせる。作品単体ではなく、そうしたハーモニーこそが作品として提示されているのだ。

このことは、恒常的な施設としてのミュージアムを持たない本学に対して、非常に重要な視点を提供する。それは、ないものねだりをするのではなく、生活という「今」に着目し、作品によってそうした状況を照らし出す視点である。今後に向けた本学ならではの大学ミュージアムのあり方を、さしあたり次のように提案することができるだろう。すなわちそれは、「4号館をミュージアムにする」ということである。先にも述べた通り、4号館は今後のキャンパス整備の中で解体されることが決まっている。役目を終えようとしている不要な存在としてではなく、今にしかできない表現のための空間として4号館をとらえ、アーティストや学生、教員、住民などの作品制作に関わる人びとが、「生活」について再考し、その成果を展示する。それらが蓄積されることにより、4号館はやがて本学や学生、そして地域の人びとにとっての生活のミュージアムになる。

近い未来になくなってしまふこのような期間限定の大学ミュージアムは、本学で今を過ごす学生や教員と、今を生きる地域の人びとやアーティストをつなぎ、解体されて新しく様変わりしてしまった後にこそ、人びとの記憶や精神として機能し、生き続けるだろう。

¹ 国の中央省庁改革の一環として組織された、学術審議会の学術情報資料分科会学術資料部会による「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」と題する報告。

² 以下を参照されたい。西尾美也（2016）「日本とアフリカをつなぐアートプロジェクトの実践研究—奈良県立大学学生の視点を活用した展覧会作りを通して」『奈良県立大学研究報告 Vo.8』奈良県立大学研究会。ここで筆者は、アートプロジェクトを、①個人の境遇を他者へと開いてゆく技術であり、②状況を変換する技術であり、③異質なものの同士をつなぐ技術として論じている。